漢字はホントは面白い　Ⅳ

動物の漢字

杉　本　　浩

　またも、２年間のご無沙汰でした。今回は動物（哺乳類）に関する漢字についてご説明します。

犬　甲骨文

犬　金文

犬　戦国文字

犬　小篆

伏　金文

狐　小篆

貓　小篆

　古代中国においても、人間の生活に欠かせない動物というと、やはり一番は犬でした。といっても、現代のようにペットとして飼うわけではなく、猟犬や番犬が主な役割でしたが、時にはこの世ならぬものの番をさせられる場合もありました。

　「伏」という字は人と犬でできていますが、殷代の王などの墓の棺の下には、この字のとおり、武装した人と犬が埋められている場合があります。これは、誰かが呪いをかけ、その力が地中を通って棺に祟るのを防ぐためと言われています。犬は忠誠心が強いだけでなく、優れた嗅覚を持っているので、悪霊を察知できるものと考えられていたようです。

　それ以外にも、神をまつるための犠牲にされたり、土地や道具を清めるために血を取られたり、古代の犬は大変だったようです。

　犬の甲骨文は左上のとおりで、今の「けものへん」に似ていますが、楷書の「犬」とはかなり形が違います。どう変化して楷書の形になったのか、間に入るものをいくつか並べてみました。納得いただけますか？

　先ほど、犬の甲骨文が「けものへん」に似ていると書きましたが、それもそのはず、日本でいう「けものへん」は、もともと犬そのものなのです。猫・狐・狸・猪・猿・獏（ばく）・獅子・猩々（しょうじょう）など、犬以外の動物によく使われますが、「犬の仲間」という意識があったのでしょう。でも、「獰猛」や狂・犯・猥・狡猾・獄など、動物以外に使われる場合はあまり良いイメージの字がありませんね。

　ちなみに猫や狸には、昔は（台湾や香港では今も）、貓・貍と書く、「むじなへん」の字を使いました。胴体の長い動物を示す部首です。そういえば「豹」もいましたね。

羊　甲骨文

青銅器の羊
殷代

豕　甲骨文

馬　甲骨文

象　甲骨文

為　甲骨文

犀　金文

虎　甲骨文

　「けものへん」や「むじなへん」のつかない動物の漢字を見ていきましょう。

　牛・羊・豚は、祭祀の際に犠牲としてささげられる動物の代表です。殷代には、毎日のように行われる祭祀のために、大量に殺されていますが、その肉をあとで重臣たちに分け与え、王の権威を高める（部下のご機嫌を取る？）ことも大事な目的だったようです。

　例として羊の甲骨文を掲げましたが、青銅器の羊の顔とよく似ていますね。

　豚は、古くは「豕」と書かれました。甲骨文は犬とよく似ているのですが、「しっぽの上がっているのが犬、下がっているのが豕」という見分け方があります（例外もあるようですが）。

　今では「にくづき」を付けた字になっていますが、動物ではなく肉の種類として扱っているようで、ちょっと気の毒になります。

　馬は、古代には戦車を牽くという重要な役割を担いました。殷代の王墓からは、馬車と、それを牽いていた馬の骨が発掘されています。漢字としては、たてがみがトレードマークとなります。

　次に、動物園にいるような動物を見ていきます。まずは「象」です。象という漢字があるからには、古代中国に象がいたのか？答えはyesです。殷の時代は温暖で（日本でも縄文末期の温暖期にあたります）、揚子江の北側にも象がいたそうです。字の一番上の「ク」の形は、おなじみの長い鼻です。

　殷代の人々は象を見るだけではなく、その強い力を利用して、運搬や建設工事に使いました。「為」は、今では象と違う形になってしまいましたが、元は象を手で操っている形です（鼻先にあるのが手です）。

　次に「犀（サイ）」。これも南方の獣ですが、中国にも知られていました。最古の漢字解説書といわれる「説文解字」（西暦100年成立）にも、「南方の辺境外の牛。一角は鼻のところにあり、一角は額にあって、ぶたに似る」と書かれ、角が２本あることが明記されているので、インドサイ（角は１本）ではなく、東南アジアに分布するスマトラサイらしいことが分かります。

　次は「虎」です。これも元は象形文字ですが、どう変化して今の字になったのか、難しいところです。ただ、異体字に「乕」があり、こちらはタイガーマスクの模様によく似ていますね。

　「虐」の下部は虎の爪です。とらえた獲物

青銅器の虎
殷代

を爪でいたぶっているようです。おおこわ！まさに人を食べようとしている虎を写した青銅器もあります。(守っているとする説もありますが)

「劇」の左側は立ち上がって胴体を見せている虎。ただしこれは着ぐるみで、その虎と刀（りっとう）を持った人たちが立ち回りをする、演劇風の儀式を意味したといわれます。戯曲の「戯」も同様の成り立ちです。

能　金文

「熊」については、字の由来がはっきりしません。上部は「能」という字ですが、これはクマの象形文字だとする説と、水中の虫の象形だとする説があります。左の金文は、クマに見えますか、それとも虫？

兎　甲骨文

「兎」の甲骨文には、なぜか耳を強調したものがあまりありません。このウサギの字に、小さいことを表す点（「小」という字の原型）を付けたのが「鼠」です。どちらも齧歯類（げっしるい）で、似ているといえば似ていますね。でも、両者とも、のちには別系統の字が使われるようになって、現代の漢字にはつながっていません。

鼠　甲骨文

いかがでしたか。大昔の人たちは、角、鼻、たてがみなどの動物の特徴を、なんとうまくとらえて漢字を作ったものだと感心してしまいます。以上で「動物編」を終わりますが、次号のテーマについて、リクエストがありましたら是非お聞かせください。

◎用語解説

・**甲骨文**　現存する最古の漢字。殷代後期（約3300年前）に登場。占いの内容や結果を亀の甲羅や獣骨に彫り込んだもの。

・**金文**　青銅器の銘文として鋳込まれた文字。殷代末期（約3100年前）に登場し、周代に盛んになった。

・**戦国文字**　中国の戦国時代に書かれた文字で、群雄割拠の時代なので文字も国ごとに変化が大きい。竹簡や帛（布）に書かれたものが多い。約2200～2400年前。

・**小篆**　秦の始皇帝が定めた統一書体。約2200年前。

◎参考文献：

「新訂字統」普及版第5刷　白川静著、平凡社　2011年　他

（文中の古代文字は、台湾・中央研究院のウェブサイト「漢字古今字資料庫」から転載しました）

＊私のホームページもご覧ください！

漢字教育士ひろりんの書斎　検索

Googleか YAHOO! JAPAN で検索！

この連載のバックナンバーも掲載しています。